

H-3 脊髄疾患に対する 高気圧酸素療法による治療戦略

朝本俊司¹⁾ 三須恭典¹⁾ 土居 浩¹⁾
杉山弘行¹⁾ 井田正博²⁾

¹⁾ 都立荏原病院脳神経外科
²⁾ 都立荏原病院放射線科

【はじめに】当院では、高気圧酸素（以下HBO）療法を当科が受け持つ関係上、様々な疾患に試みてきた。過去に多くの学会・論文等で報告してきたが、1995年の開院以来、とりわけ脊髄疾患に対してこのHBO療法を応用してきた。今回、我々の施設でのHBO療法による治療戦略をここに報告したい。

【対象・方法】当院での脊髄疾患に対するHBO療法の考え方としては、急性期外傷に対しては全例その適応があると考え、これは、手術の適応、非適応に関係なく、HBO療法を行う。慢性期の脊髄損傷に対しては、基本的には適応外と考えるが難治性の痛みに対しては試みる場合もある。しかし、現在のところその効果はあまり期待出来ないのが現状である。次に、外傷以外の疾患である。外傷以外は、まず、何らかの理由で手術に至らない症例に対し、保存的治療の一環として行っている。手術に至らない理由としては、手術の拒絶、高齢、全身麻酔に対するリスクのある症例、手術の適応まではいかないが薬物療法が功を奏さない症例、等である。疾患別には、頸椎症性神経根症、頸椎症性脊髄症、頸椎椎間板ヘルニア、腰椎椎間板ヘルニア、変形性腰椎脊柱管狭窄症、である。脊椎椎体・椎間板炎、脊髄腫瘍に対する試みは現在までのところ無い。

【結果】脊髄急性期外傷に対しては、有効な結果を得ている（Spinal Cord;2000, Vol.38）。頸椎症に関してもプロスタグランディン製剤との併用で相乗効果が得られる事も報告済みである（脊髄外科；2002, Vol.16）。

【結論】確かにHBO療法の機序は未だ不明の点が多い。しかし、副作用や合併症も極めて少なく、保存的療法の一手段としては極めて有用である。また、薬物療法との併用もでき、これからさらに応用と発展の期待ができる有用な治療法と我々は位置付ける。

H-4 前十字靭帯新鮮損傷に対する 高気圧酸素治療併用の試み

吉田公博 川島真人 田村裕昭 永芳郁文
高尾勝浩 山口 喬

（医療法人玄真堂 川島整形外科病院）

【目的】受傷後2週以内の前十字靭帯（以下ACL）新鮮損傷患者に対して、高気圧酸素治療（以下HBO）を併用することにより、靭帯の治癒に必要な血行を改善させることで、損傷靭帯の治癒率が向上するかどうかを検討した。

【対象・方法】対象は平成9年4月から平成13年10月までに、受傷2週以内に当院を受診したACL新鮮損傷患者であり、受診後及び、受傷3ヵ月後に関節鏡検査を行った56例である。すべての対象において、ACL損傷の診断直後よりKyuro膝装具を装着し理学療法を行い、HBOを併用しなかったものを非HBO群、HBOを併用したものをHBO群として、受診時及び受傷3ヵ月後に関節鏡検査、KT-1000による弛緩性評価を行い比較した。

【結果】非HBO群は43例、HBO群は13例であった。受傷後3ヵ月後のKT-1000による弛緩性の評価においては、非HBO群 6.9 ± 2.4 mmから 1.6 ± 2.3 mmへと改善されており（ $p < 0.0001$ ）、HBO群においても 7.3 ± 3.5 mmから 0.7 ± 3.0 mmへと改善されていた（ $p < 0.0001$ ）。しかし2群間において有意差は認められなかった。

3ヵ月後の再鏡視評価における靭帯治癒基準は、Ⅰ：緊張良好で太さがほぼ正常のもの、Ⅱ：緊張良好であるが太さが2/3程度のもの、Ⅲ：太さが1/2程度まで減少したもの、Ⅳ：太さが1/2以下及び消失したものと評価した。その結果、非HBO群においてはⅠ：21例（48.8%）、Ⅱ：7例（16.3%）、Ⅲ：10例（23.3%）、Ⅳ：5（11.6%）であり、HBO群においてはⅠ：6例（46.2%）、Ⅱ：3例（23.1%）、Ⅲ：3例（23.1%）、Ⅳ：1（7.7%）であり、2群間において有意差はみられなかった。

【結論】今回、2群間のKT-1000による弛緩性の評価、鏡視所見による靭帯治癒状況における有意差は認められず、HBOを併用することでの靭帯治癒率の明確な向上を確認できなかった。今後は長期的な追跡調査を行うとともに、受傷時の靭帯断裂状態、MRI所見、筋力等、新たな評価項目も追加して検討する。